

フェミニスト・ヒストリーからジェンダー、 トランスナショナル・ヒストリーへ

—— イギリス女性教育史研究半世紀のあゆみ ——

香川 せつ子

(西九州大学)

はじめに

「歴史は現在と過去との対話である」とは、イギリスの歴史家E・H・カーの、あまりにも有名な言葉である¹。これを教育史にあてはめてみれば、「教育史は、現在の教育と過去の教育との対話である」。しかし、日本の教育学界では、過去の教育を研究対象とする者が、現在進行中の教育の研究者と対話する機会は多くない。かくいう私も、二十年近くも日英教育学会（入会当時は、「日英教育フォーラム」）の会員でありながら、歴史研究に没頭して、本研究会が発信するホットな教育情報を的確にキャッチすることをしないまま今日に至った。専門分化と実証研究が進展するなかで、教育史研究と教育行政研究との距離は広がるばかりのような気がする。そうしたなかで、日英教育学会大会シンポジウムとして、「英国教育史研究の軌跡と展望——歴史を紐解く時間」を設けていただいたことに感謝したい。「女性教育史研究半世紀のあゆみ」などという大きなサブタイトルをつけてしまったが、私がフィールドとしてきた女性の教育史について、この数十年間に、どのようなテーマが取り上げられ、どのような研究方法が用いられてきたか、それを紹介することで、現在の英国教育の研究に少しでもヒントになるものがあれば幸いに思う。

女性教育史という領域は、教育学においても、歴史学においても、従来周縁的な位置しか与えられなかった。日本では現在でもそうでないとは言いきれない。しかし、イギリスにおける教育史研究の地図は徐々に塗り替えられ、ジェンダーの主流化が進んでいる。この傾向は1976年の設立から50年を迎えたHistory of Education Society, UKにおける活動状況からも窺い知れる。同学会の21世紀に入ってからの会長7名のうち4名が、女性やジェンダーの教育史を主とする女性の研究者である。女性やジェンダーを主テーマとしない研究でも、大半の研究がダイバーシティを意識して、女性や非白人等、いわゆるマイノリティへの目配りをもつ²。

さて、同学会のホームページをみると、その目的は「教育史の研究と教育を推進する」ことにあり、「会誌*History of Education*は、教育専門家 (educationist) と社会史家 (social historian) の両方にとって重要な学術雑誌として認められている」と書かれている³。イギリスの教育史研究は、その時々々の教育問題や教育政策、教育実践に根差しつつも、社会史の一環として、歴史学や社会学から理論的・方法的な影響を受けて発展してきた。女性教育史もまた歴史学の様々なアプローチを取り入れることで、研究テーマの多様化と方法の精緻化が進み、フォーマル、インフォ

ーマルな場での少女や女性の教育経験が様々な切り口から検討されている。私がイギリスの女性教育史に関心を持ち、修士論文のテーマとしたのは1980年代のはじめだが、今日に至るまで、次々と新しい視点や方法を取り入れて量産される欧米の研究成果をフォローすることに精一杯、いや十全にはフォローしきれない40年間であったと言わざるを得ない。そのような自分を反省しつつ、イギリス女性教育史研究の半世紀を振り返ってみたい。

1. 女子教育史からフェミニスト教育史へ

(1) 学校史、伝記による教育史

女子教育の通史は1960年代から刊行され始めるが、その大部分は19世紀の女子教育改革にハイライトをあてている。1848年のクィーンズ・カレッジの設立に始まり、1860年代のトントン委員会による学校調査と女子教育改革の提言、1860年代末から1870年代のケンブリッジ、オックスフォード両大学にアフィリエイトする女性カレッジの設立と近代的女子中等学校の発達、これら一連の出来事を時系列に叙述し伝統的教育史のなかに差し込むことが、初期の女子教育史研究の役割でもあった。

女子教育の編年史の基となったのは、上記トントン委員会の膨大な報告書に加えて、先駆的な女子教育機関の学校史やその創立者たちの自伝や伝記である。エミリ・デイヴィス、ドロシア・ピール、フランシス・メアリ・バス等のパイオニアの伝記と彼女らが関係する学校史は、今でも女子教育史研究の基礎資料である⁴。なかでも、バーバラ・ステイヴン著『エミリ・デイヴィスとガートン・カレッジ』（1921年）は、女子教育改革当事者の書簡や日記を基に、女性カレッジ設立にいたるまでのフェミニスト、社会改革者、大学人、女性教育者等のネットワークとその内部の確執を克明に描いた貴重な図書といえる。早くも19世紀末にはアリス・ジマーン著『イギリス女子教育の再生——50年間の前進の記録』（1898年）のような包括的で読みやすい著作も刊行されていた⁵。19世紀の女子教育改革は、女性参政権、女性の雇用の拡大と並ぶ第一波フェミニズムの目標であった。イギリス女性運動史の古典レイ・ストレイチャー著『イギリス女性解放運動史』（1928年）では、女性史、女性運動史の視点から女子教育改革が詳述されている⁶。

これらの著作の特徴は、「傑出した女性たち（women worthies）」の功績を称賛し、女性の教育機会の拡大を「勝利」と評価してその前進を跡付けるサクセス・ストーリーであることだ。こうした傾向はのちに進歩史観として批判され、より客観的で分析的な女性の教育史叙述がめざされてきた⁷。後述するフェミニスト教育史は、物語としての教育史から脱出して、アカデミズムの一角に位置づかための格闘の成果といえよう。現代の研究者にとって、学校史や自伝／伝記がもつ意味は、当事者による同時代の語りや記録としての資料的価値である。少女として家庭や学校で受けた教育の回想、ある時はそれに順応し、ある時は反発しながら成長して女性教育家となるまでの意識変容、学校の設立経営にまつわる教師、生徒、保護者間の軋轢と調和、女性教育パイオニアが陥った自家撞着、それらを掬い上げることは、教育固有の営みを歴史の場に蘇らせ、過去に生きた人間の主観性をとらえた歴史分析の可能性を開く。

(2) フェミニスト教育史の登場

History of Education Society, UK 創立30周年記念大会で当時の会長であったルース・ワッツ (Ruth Watts) —— 2002年に女性として初めての会長に就任——は過去の活動を回顧し、女性とジェンダーに関する教育史研究が切り開いた地平を総括している。それによれば、1976年の最初の研究大会に女性は多数参加していたが、基調講演者に選ばれることはなく、女性に言及する報告もなかった。唯一の例外が女性教育研究グループの会合であり、キャロル・ダイハウス (Carol Dyhouse)、ジューン・パーヴィス (June Purvis)、ペニー・サマフィールド (Penny Summerfield)、ガビー・ワイナー (Gabby Winer) 等が参加したという⁸。このグループが中心となって、フェミニスト教育史が開花した。その背景に、1960年代末のアメリカを端緒に世界に広がった第二波フェミニズムがあったのは、言うまでもない。近代社会における性別役割分業のしくみを解き明かし、「女性らしさ」の本質を究明するために、教育が果たした役割を検討することは、第二波フェミニズムの核心を突く問題でもあった。ヴィクトリア朝社会こそが、現代まで続く家庭や女性に関する規範と制度の原型と目され、この時代の少女たちが家庭でどう育てられ、どんな教育を受けたかに、英米研究者の視点が集中した。ジューン・パーヴィスは、フェミニスト・パースペクティブに立つ教育史の特徴を、第一に女性を可視化すること (making women visible)、第二に女性を歴史の主体とすること、第三に男性と女性の権力関係、特に性別役割分業 (sexual division of labour) を検証すること、第四に女性の日常的な教育経験を掘り起こすこと、とまとめている⁹。第三の男女の権力関係や性別役割分業については、その後ジェンダーや公私分離論をめぐる論争へと発展することになった。

フェミニスト教育史の全盛期に書かれた著作が、イングランドにおけるミドルクラス的女子教育に偏っていることは否めないが、そうであるにしても豊かなバリエーションがある。ワッツと肩を並べる著名な教育史家キャロル・ダイハウスは、『ヴィクトリア朝後期とエドワード朝期のイングランドで育った少女たち』(1981年)『イングランドのフェミニズムと家族——1880年から1939年』(1989年)において、ジェンダーと階級を連結させつつ、少女たちの育った家庭環境のみならず、知的教育を標榜する近代的女子学校もまたフェミニニティを再生産する場であったことを暴露した。彼女はまた『性差別は存在しないのか? —— イギリスの女性と大学』(1995年)、『学生たち——ジェンダー化された歴史』(2006年)等において、高等教育における「隠れたカリキュラム」に着目し、ジェンダー不平等の歴史を追及している¹⁰。女子教育改革に社会学的分析を導入したジョイス・ペデルセン (Joyce Pedersen) の『ヴィクトリア時代のイングランドにおける女子中等・高等教育——エリートと教育変化に関する研究』(1987年)も必読である¹¹。他にも『家庭の天使』の規範と女性の高等教育反対論を検討したジョアン・バースティン (Joan Burstyn) の『ヴィクトリア時代の教育と女性の理想像』(1980年)、学校生活・学校文化におけるフェミニニティ形成を主題とするフェリシティ・ハント (Felicity Hunt) 編著『人生のためのレッスン——1850年から1950年までの少女と女性の学校教育』(1987年)等、興味深い成果がある¹²。また、ジューン・パーヴィスは、『厳しい教訓——19世紀イングランドにおける労働者階級女性の生活と教育』(1989年)で労働者階級の女性の成人教育に論及した¹³。

2. ジェンダー史の衝撃

歴史学における「新しい文化史」——ポスト構造主義、言語論的転回、ポストコロニアリズム等——の影響は1990年代以降の女性教育史にも及んだ。とりわけポスト構造主義の下で発展したジェンダー理論が女性の教育史に与えた影響は計り知れない。その中心的論客ジョーン・スコットは、ジェンダーを「肉体的性差に意味を付与する知」と定義し、語られるべきは、「男性や女性に何が起り、それに対して彼ら／彼女らがどんな行動に出たか」ではなく、「女性や男性の主観的で集会的な意味が、アイデンティティのカテゴリーとしてどう構築されたか」であると指摘した。すなわち、女性の経験を記述するのでは不十分であり、「男なるもの」、「女なるもの」のアイデンティティの相互依存性と関係性を問題とし、それがいかにして社会的に構築されたかを追求することの必要性を指摘したのである。スコットはまた、「女性」という単一的カテゴリーで括ることに異議を唱え、女性の生きた経験は階級や人種、民族によって異なることを強調した¹⁴。

ジェンダーと権力関係を分析軸とする女性の教育史の扱うテーマと視点は、マスキュリニティとセクシュアリティの構築、ジェンダー化された政治と教育への侵入、ネットワークと不可視化されたグループの経験、個々の女性がつもつ多様な経験への伝記的アプローチ、ポストコロニアル・アプローチなど、多様にしてより精緻な研究へと発展した¹⁵。2011年にラウトリッジ「教育の主要テーマ」シリーズのひとつ「女性と教育」(全4巻)は、ジョイス・グッドマン (Joyce Goodman) とジェイン・マーティン (Jane Martin) の編集によるもので、1977年から2009年までに発表された学術論文の中から75編が選び出され、「第1巻 空間、場所、時」ではグローバル化とポストコロニアリズム、「第2巻 生徒、学生、学習」「第3巻 教師と教えること」では学び、教える「主体」の経験、「第4巻 政治と政策」では教育と行政のポリティクスという大テーマのもとに分類され、収録されている¹⁶。

ワッツやダイハウス等の女性教育史のバイオニアたちを「第一世代」と呼ぶならば、グッドマンとマーティンは「第二世代」を牽引した代表的な研究者といえる。彼女らはフェミニスト教育史を批判的に継承し、教育とジェンダーのポリティクス (politics, relationships of power) の解明を中心に据えて、幅広いテーマのもとで多くの著作を発表した。19世紀末に女性が地方の教育行政に進入し、政策方針決定過程に参画していく過程とその戦略・戦術を分析したジェイン・マーティンの『ヴィクトリア朝期およびエドワード朝期における女性と学校のポリティクス』(1999年)、女性校長による学校経営、女性の地方教育行政への参画など、女性のリーダーシップとパフォーマンス、男性権威者との力学を考察したジョイス・グッドマンとシルビア・ハロップ (Sylvia Harrop) の共著『イングランドにおける女性と教育政策の決定と経営——1880年から2000年までの権威をもった女性』(2000年)等がある¹⁷。マーティンとグッドマンは、英、米、オランダ、ドイツ、オーストラリア、南アフリカの教育史研究者の共同執筆による論文集『ジェンダー、植民地主義と教育——教育における政治的経験』(2002年)を編集している。そこでは、帝国と植民地の政治的文脈から、高度な教育を受けた女性たちのネットワークと、先住民エリー

ト女性の複雑にジェンダー化されたアイデンティティを浮き彫りにすることで、白人男性中心教育史へのカウンター・ナラティブが示された¹⁸。

1990年代以降の女性教育史は、ポスト構造主義、ポストコロニアリズムや言語論的転回等の「新しい社会史」の動向に対応しつつ、ジェンダーを分析概念の中軸として研究の対象を拡大した。教育史の全般的な叙述において、ジェンダーは、階級、人種・民族、宗教とともに不可欠な分析要素とされ、女性の教育史はもはや特殊な一領域とはみなされなくなった。その位置取りは、教育史の周縁から中心へと徐々にシフトしたのである。

3. ジェンダーとトランスナショナルの教育史へ

トランスナショナル・ヒストリーは、グローバル化する世界情勢を背景に、1990年代以降英語圏の歴史家のあいだで興隆した。アメリカに拠点を置く国際政治学者である歴史家入江昭は、トランスナショナル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーをほぼ同義とみなし、ともに国民国家を単位とするナショナル・ヒストリーに対抗して生まれた概念であるとする。国家間の関係や外交政策等を対象とする外交史や国際関係史に対して、トランスナショナル・ヒストリーは非政府組織や個人の国境を超える活動に注目する¹⁹。

教育史におけるトランスナショナル・アプローチの導入は、歴史学におけるトランスナショナル・ヒストリーの潮流に影響を受けたものだが、教育学においては国際教育や比較教育と対する概念としての意味をもつ。ヴェラとフックスによれば、第一次世界大戦後の国際協調を背景とする国際教育や比較教育のアプローチは、各国の教育制度を統計情報（識字率や就学率等）に基づいて比較し、より上位の国（多くは西洋）をモデルとして他の国々が後追いつく構図を含意していた。それに対して、トランスナショナル・アプローチでは、人（個人あるいは集団として）やモノの国境を越えた動きに着眼して、ある国で生まれた教育の思想、理論、実践が他国へと伝播する場面を切り取り、異なる社会や文化が遭遇することによって生じる教育の転移や変化の双方向的過程を検討する²⁰。

トランスナショナルな教育史へのアプローチは、ジェンダーと接点を切り結ぶ。なぜなら、教育史に登場する教育思想家の大半が男性であるように、教育の理論は男性が構築した知の体系から生まれ、教育政策決定の過程も男性に掌握されていた。実際生活上では、女性は、母親や教師として、子どもを教育する役割を担っていたにもかかわらず、である。トランスナショナルな分析空間の設定によって、女性もまた教育や職業の場を求めて国境を移動したこと、教育理論が実践化される過程で不可欠な役割を担ったことに照明が当てられるようになった。

イギリス教育史において、トランスナショナル・アプローチに基づく女性教育史研究を牽引するのが、ジョイス・グッドマンである。彼女のこの領域での研究は、19世紀末の内外学校協会の女性委員会の海外における活動と言説の分析に始まり、第一次世界大戦後の国際的な教育活動や平和運動に関与した女性の活動、さらにアジアから汎太平洋地域へと射程を広げている。そこでは、女子中等教育の理念や概念が、女性教育のリーダーや女性教師たちの国際的組織を通してどのように流布したか、また女性教育者たちがトランスナショナルな動きの中で女

子教育についてどう論議したかを検討することにより、教育を媒介とした西洋的文化と価値の世界的伝播、その過程での他国文化との衝突と混交のありようが究明されている²¹。グッドマンは、津田英学塾の教師である粕谷よしが執筆したコロンビア大学博士論文「米英独の女子中等教育の比較研究——日本の視点から」(1933年)に着眼した研究を展開しており、日本人研究者には特に興味深い²²。

トランスナショナルな教育史の理念は欧米の教育史研究者の間で定着しているが、その概念は多義的であり、定型化された方法が確立されている訳ではない。2019年に刊行が始まったバルグレイブ・マクミラン社のGlobal Histories of Education Seriesの第1巻『教育史におけるトランスナショナル——概念と視点』は、それが様々な理論の混成体であることを示す²³。その先駆けとみなされるのが、ドイツやフランスでの*histoire croisée*、英語圏では*entangled history*(交差、交錯の歴史)と呼ばれる、歴史上の諸事象が時空を横断するなかで生起する転移や伝播、交差、混交の構造を解明しようとする歴史の方法である。2019年8月学習院大学で開催された世界教育学会の自主シンポジウムで、グッドマンはトランスナショナルな教育史の方法と枠組みについて、メッシュワーク、ポストヒューマニズム、複合的時間性等の概念を用いて説明した²⁴。これらの理論に通底するのは、西洋中心主義、合理主義に基づく近代概念を相対化し、人と自然との関係や時間の概念を再検討しようとする姿勢である。これらの文脈と方法において、近代社会で構築されたジェンダーと権力との関係に新たな光が放たれる。

トランスナショナルとジェンダーの視点で教育史を見直すことは、一国単位の教育制度や政策の分析にとどまりがちである日本の教育史研究に新しい方向を指し示すように思われる。女性の教育史に限っても、学生や教師として、西洋と日本の間を往復した女性の存在と活動など新たな研究対象が浮かび上がる。伝統的な歴史学の枠を超えて、社会学、哲学、人類学にまたがる理論を援用して進化するトランスナショナル・ヒストリーの理論と方法を、女性教育史の分析と叙述に応用するのは容易なことではなく、私自身が模索の最中である。経済のグローバル化と政治の自国主義が並行するかのような世界の情勢をみたとき、トランスナショナルという視点は、歴史の方法としてだけでなく、現在進行中の教育制度や教育改革を検討するうえでも有効ではないだろうか。

おわりに

以上、イギリスにおける女性教育史研究の半世紀の歴史を大雑把にレビューした。最後に私の一研究者としての歩みに言及して筆をおくことにしたい。

私が大学院に入学したのは1880年代の初頭である。第二波フェミニズムの影響下、1975年に最初の国連世界女性会議が開催され、アメリカで誕生した女性学が日本に紹介された頃であった。社会思想史や西洋史の領域では、水田珠枝氏や河村貞枝氏によってイギリス女性史の研究が始まっていた²⁵。教育史では、梅根悟編『世界教育史体系』の第34巻(1977年)に「女子教育史」が設けられ、日本やロシア等と並んで欧米の女子教育史が紹介されていた²⁶。本格的なイギリス女子教育史の研究書は刊行されておらず、テーマを言うと「そんなものがあるのか」といった怪訝な

顔をされた。幼児教育や家族の教育なども主流からはずれると思われていた時代である。

しかし、水田氏や河村氏の著作で引用された文献を手掛かりに資料収集を始めると、英米では19世紀女子教育に関する文献が豊富にあるのに驚いた。本論でその一部を紹介した通史、学校史、伝記を英国から取り寄せて修士論文を作成したのだが、それと並行してワッツやダイハウスなどフェミニスト教育史家の著作や論文が次々と刊行された。1991年にオープン・ユニバーシティから刊行されたジューン・パーヴィスの*A History of Education in England*は、それらの総まとめともいえる著作であり、その翻訳を『ヴィクトリア時代の女性と教育——社会階級とジェンダー』という邦題で出版にこじつけた²⁷。

1990年代以降は、上述したように、ジェンダーとポスト構造主義、言語論的転回、ポストコロニアリズムの影響下、イギリスの女性教育史研究が多様な理論的発展を遂げた時期であり、それ以前の実証に基づく教育史に親しんだ私には、続々と発表される研究成果を理解するのに時間がかかった。遅れ遅れながらも、何とかこの流れについていけたのは、ちょうど21世紀に入った頃から、歴史学、社会史、思想史、文学等の領域をまたぐ学際的な研究会が生まれ、参加できたからだと思う。ジェンダーはすべての領域で重要な分析概念であったし、歴史の考察に必要な概念や方法も、学問分野を超えた研究者の交流を通して学ぶことができた²⁸。

私自身は、女性の高等教育を軸に、19世紀後半における女性の高等教育機会の拡大過程と女性教育運動、草創期に高等教育を経験した学生のキャリア・パス、女性のアカデミック・プロフェッションや医師職への進出などについて、ささやかながらも研究を進めてきた²⁹。その過程で気づかされたのは、医学教育や学位取得のためにイギリスから海外に留学する女性、イギリスの大学を修了後にアメリカの大学に就職する女性の存在である。折よく「欧米大学間における女性の教育研究交流に関する歴史的研究」が科研費に採択され、2016年2月に英国からジョイス・グッドマン氏を招聘しての国際シンポジウムを、研究者のネットワークに支えられて実現することができた³⁰。私のなかでトランスナショナルな教育史への関心が高まり、History of Education Society, UKや、ISCHE (International Standing Committee for History of Education)、WERA (World Education Research Association) という国際学会にも遅ればせながら参加し報告する機会を得た。

上述したように、トランスナショナルな女性教育史の叙述は容易ではない。日本の教育史を世界に向けてもっと発信する必要があるのは確かだが、かといって日本で過去に起こったことから人物を紹介するだけのレベルでは共通の論議は成立しない。イギリス教育史の一研究者として、イギリスにおける女性教育史の文脈と研究成果を踏まえつつ、日本の女性教育者の留学等によるイギリスや他国とのかわり、さらには日本の女性教育との双方向的な循環というものを究明することができれば、トランスナショナルな女性教育史に近づけるのではないかと思う。それに向けての一步一步を進めていくのが、私のこれからの目標である。

1 E. H. カー『歴史とは何か』岩波書店、1962年。

2 山崎洋子「『インターナショナルからトランスナショナルへの交錯史』探訪——イギリス教育史家の

- 葛藤と矜持」『教育学研究』第85号第4巻、2018年、493-505頁。
- 3 History of Education Society, UK <<https://historyofeducation.org.uk/>>.
 - 4 初期に編纂された学校史や伝記のうち代表的なものを挙げれば、Barbara Stephen, *Emily Davies and Girton College*, 1921, reprinted by Hyperion Press, 1976. Alice Gardner, *A Short History of Newnham College, Cambridge*, 1921. Elizabeth Raikes, *Dorothea Beale of Cheltenham*, 1908. A. K. Clarke, *A History of the Cheltenham Ladies' College 1853-1953*, 1953. Sara Burstall, *Frances Mary Buss : An Educational Pioneer*, 1938. *The North London Collegiate School 1850-1950*, 1950. Margaret J. Tuke, *A History of Bedford College for Women 1849-1937*, 1939. Elaine Kaye, *A History of Queen's College, London 1848-1972*, 1972. 等。
 - 5 *Alice Zimmern, The Renaissance of Girls' Education in England : a Record of Fifty Years' Progress*, I. D. Innes, 1898.
 - 6 Ray Strachey, “*The Cause*” : *A Short History of Women's Movement in Great Britain*, G.Bell and Sons, 1928. (吉田尚子ほか訳『イギリス女性運動史：1792-1928』みすず書房、2018年。)
 - 7 June Purvis, ‘From “women worthies” to poststructuralism? Debate and controversy in women’s history in Britain’, in Purvis, ed., *Women's History Britain, 1850-1945 : An Introduction*, London : UCL Press, 1995, 1-22.
 - 8 Ruth Watts, ‘Gendering the Story : Change in the History of Education’, *History of Education*, 34-3, 2005, 225-241.
 - 9 June Purvis, ‘A Feminist Perspective on the History of Women’s Education’, June Purvis, ed., *The Education of Girls and Women : Proceedings of the 1884 Annual Conference of the History of Education Society*, History of Education Society, 1985, 1-12.
 - 10 Carol Dyhouse, *Girls' Growing Up in Late Victorian and Edwardian England*, London : Routledge & Kegan Paul, 1981. Do, *Feminism and the Family in England, 1880-1939*, London : Basil Blackwell, 1989. Do, *No Distinction of Sex? : Women and Universities in British Universities 1870-1939*, London : UCL Press, 1995. Do, *Students : A Gendered History*, London: Routledge, 2006.
 - 11 Joyce Senders Pedersen, *The Reform of Girls' Secondary and Higher Education in Victorian England : A Study of Elites and Educational Change*, Garland, 1987.
 - 12 Joan Burstyn, *Victorian Education and the Ideal of Womanhood*, London : Croom Helm, 1980. Felicity Hunt, *Lessons for Life : the Schooling of Girls and Women, 1850-1950*, London : B. Blackwell, 1987.
 - 13 June Purvis, *Hard Lessons : the Lives and Education of Working Women in Nineteenth Century England*, London : Policy Press, 1989.
 - 14 Joan Wallach Scott, ‘Gender : A Useful Category of Historical Analysis’, in Scott, *Gender and the Politics of History*, New York : Columbia University Press, 1989, 28-50. (荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社、1992年)。スコット以降のジェンダー史については、ジュディス・バトラー（竹村和子訳）『ジェンダー・トラブルーフェミニズムと性の攪乱』青土社、1999年、ソニア・O・ローズ（長谷川貴彦・兼子歩訳）『ジェンダー史とは何か』法政大学出版局、2016年を参照。
 - 15 Ruth Watts, ‘Gendering the Story : Change in the History of Education’, *History of Education*, 34-3, 2005, 225-241. Joyce Goodman, ‘The gendered politics of historical writing in History of Education’, *History of Education*, 41-1, 2012, 9-24. 香川せつ子「『女性、ジェンダー、教育』の歴史——イギ

- リスにおける到達点と課題」『女性とジェンダーの歴史』第3号、32-42頁。
- 16 Jane Martin and Joyce Goodman, eds., *Women and Education, Major Themes in Education*, Vol.1-4, London : Routledge, 2011.
- 17 Jane Martin, *Women and the Politics of Schooling in Victorian and Edwardian England*, London & New York : Leicester University Press, 1999. Joyce Goodman and Sylvia Harrop, eds., *Women, Educational Policy-Making and Administration in England : Authoritative Women since 1880*, London : Routledge, 2000.
- 18 Jane Martin and Joyce Goodman, eds., *Gender, Colonialism and Education : the Political Experience of Education*, London : Woburn Press, 2002.
- 19 Akira Iriye, *Global and Transnational History : The Past, Present, and Future*, London & New York : Palgrave Macmillan, 2013.
- 20 Eckhardt Fuchs & Eugenia Roldan Vera, eds., *The Transnational in the History of Education : Concept and Perspectives*, Palgrave Macmillan, 2019.
- 21 Joyce Goodman, 'Languages of female-colonial authority : the educational networks of the Ladies Committee of the British and Foreign School Society, 1813-1817', *Compare*, 30 : 1, 2000, 7-19. Do, 'Working for Change Across International Borders : the Association of Headmistresses and Education for International Citizenship', *Paedagogica Historica*, 43-1, 2007, 165-180. Do, 'Cosmopolitan women educators, 1920-1939 : inside/outside activism and abjection', *Paedagogica Historica*, 46-1-2, 2010, 69-83. Do, 'International citizenship and the International Federation of University Women before 1939', *History of Education*, 40-6, 2011, 701-721. Do, 'Women and international intellectual co-operation' *Paedagogica Historica*, 48-3, 2012, 357-368. Do, 'Education, internationalism and empire at the 1928 and 1930 : Pan-Pacific Women's Conferences', *Journal of Educational and Administrative History*, 2014.
- 22 Joyce Goodman, 'Gender, cosmopolitanism, and transnational space and time : Kasuya Yoshi and girls' secondary education' *History of Education*, 45-1, 2015, 1-17. Do, 'Temporalities and Transnational : Yoshi Kasuya's Considerations of Secondary Education for Girls in Japan (1933)' in Eckhardt Fuchs & Eugenia Roldan Vera, eds., *The Transnational in the History of Education : Concept and Perspectives*, Palgrave Macmillan, 2019, 201-229.
- 23 Eckhardt Fuchs & Eugenia Roldan Vera, eds., *The Transnational in the History of Education : Concept and Perspectives*, Palgrave Macmillan, 2019.
- 24 Joyce Goodman, Gender and Transnational Perspectives in the History of Education : Theoretical Framework and Research Methods, presented on 8th August in 2019 at 10th Focal Meeting of World Education Research Association. 2019年8月10日に津田塾大学で開催された国際セミナーにおける基調講演も参照のこと。Joyce Goodman, Local, National and Transnational Flows in the Japanese-style Classrooms in Bryn Mawr College Campus, U.S. : Timespacematter and Transnational Histories of Women's Education (香川せつ子・中込さやか・内山由理訳、『津田塾大学言語文化研究所所報』第35号、2020年84-104頁)。
- 25 水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波書店、1973年。同『女性解放思想史』筑摩書房、1979年。西村(河村)貞枝、「イギリス・フェミニズムの背景——ヴィクトリア期ガヴァネスの問題」『思想』(601)、1974年、61-70頁。

- 26 梅根悟監修 川野辺敏ほか『世界教育史体系 34 女子教育史』講談社、1977年。イギリス女子教育史を主題とした最初の和書は、滝内大三『イングランド女子教育史研究』法律文化社、1994年。
- 27 ジューン・パーヴィス著・香川せつ子訳『ヴィクトリア時代の女性と教育——社会階級とジェンダー』ミネルヴァ書房、1999年 (June Purvis, *A History of Women's Education in England*, Milton Keynes : Open University Press, 1991)。
- 28 河村貞枝・今井けい『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年。香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育』（比較教育社会史叢書）昭和堂、2008年を参照のこと。
- 29 香川せつ子「イギリスにおけるアカデミック・プロフェッションの生成と展開——1870年から1930年までを中心に——」『西九州大学子ども学部紀要』第1号、2009年、37-48頁。同「ケンブリッジ大学における女性科学者の系譜——19世紀末から20世紀初頭にかけての時期を中心に——」『西九州大学子ども学部紀要』第6号、2014年、1-12頁。同「『女性のプロフェッション』としての医業と医学教育——ロンドン女子医学校の教育戦略」香川・河村編『女性と高等教育』昭和堂、2008年、同『女性と医学教育（別冊日本語版解説）』ユーリカ・プレス、2014年等。
- 30 Joyce Goodman, 'Transnational Perspectives and International Networks of Women's Education : Britain, United States, and Japan.' *Women and Gender in History : Journal of the Japan Women's Histories Network*, 4, 2017, 3-23. (中込さやか・内山由理訳「女性の高等教育のトランスナショナルな展開と国際的ネットワーク—イギリス・アメリカ・日本」『女性とジェンダーの歴史』第4号、2017年、3-23頁)。Do, 'Research Trends in British History of Education : Gender, Transnationalism and Agency.' *Journal of Children's Studies of Nishikyushu University*, 8, 2017, 93-122. (香川せつ子・内山由理・中込さやか訳「イギリス教育史の潮流——ジェンダー・トランスナショナル・エージェンシー」『西九州大学子ども学部紀要』、第8号、2017年、93-122頁)。

【付記】

本稿は、日英教育学会第28回大会シンポジウムでの報告に加筆修正したものである。また本稿で触れた研究は、JSPS 科研費 K18K02323 の助成を受けている。